

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 14

Billie Holiday 【ビリー・ホリデイ】

～ “レディ・デイ” と呼ばれた不世出の天才歌手～



写真提供：ユニバーサルミュージック株式会社

Profile

1915年4月7日、米国メリーランド州ボルチモアで生まれる。本名はEleanora Fagan。父親のクラレンス・ホリデイは、フレッチャー・ヘンダーソン楽団でギター&バンジョーを弾いていた。14歳の時NYで売春婦罪で投獄される。15歳の夏、NYのクラブでオーディションに合格。33年ジョン・ハモンドの目に止まり、ベニー・グッドマン楽団の伴奏で初録音。その後、クラブや劇場に出演を続け、35~39年にテディ・ウィルソンのブランズウィック・セッションに参加。その間、バック・クレイトンやレスター・ヤング等と共演。そして、37年にカウント・ベイシー、38年にアーティー・ショウ楽団の専属歌手として活躍。30年代末から40年代半ばにかけて絶頂期を迎え、ジョン・ハモンドによって設立された“コモドア・レーベル”に吹き込んだ「奇妙な果実」によって、一気にスターダムにのし上る。46年には初のソロ・リサイタルを開き、映画『ニューオリンズ』にも出演。そして、JATPへの参加など順調な活動を続けていたが、47年5月に麻薬不法所持で逮捕され48年2月まで刑務所に入る。50年代はクラブ、劇場やコンサート・ホールで歌い続け、ノーマン・グランツのプロデュースによって多くの名盤を発表するが、次第に病魔に蝕まれていき、声の衰えは隠せなくなった。57年、マル・ウォルドロン・トリオを従えて「ニューポート・ジャズ・フェスティバル」に出演。58年9月にはバック・クレイトン、コールマン・ホーキンスと共にTV番組に出演。59年最後のアルバム『ラスト・レコーディング』を録音後、1959年3月15日にビリーを支えつづけた恋人レスター・ヤングが亡くなり、その4ヶ月後の7月17日、NYのメトロポリタン病院でレスターの後を追うように旅立っていった。享年44歳。

レスターの名演に寄り添うように歌うビルリーの歌声が最高！



ビルリーとレスター ~ジャズ・ストーリー~
ビルリー・ホリデイ&レスター・ヤング
 (ソニーレコード:SRCS-8905)

ビルリー・ホリデイ (vo)、
 レスター・ヤング (ts)、他

1. あたしの彼氏
2. 今年のキス
3. あの人でなければ
4. 通り雨
5. ばかあなた
6. 気ままな暮らし
7. 月夜の舟
8. あたし変わるの
9. ひどい旅
10. あなたが微笑んだら
11. あなたの第一印象
12. 夢がかなうなら
13. 愛のたざ
14. あなたは幸せ者 (他、全 16 曲)

ビルリー絶頂期の歌声が聴ける不朽の名盤

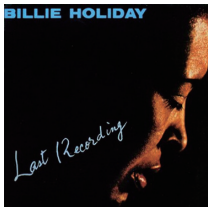


奇妙な果実
ビルリー・ホリデイ
 (ユニバーサル:UCCU-5009)

ビルリー・ホリデイ (vo)、タブ・スミス、
 レン・ディヴィス (sax)、フランク・
 ニュートン、ドク・チータム (tp)、ヴィック
 ・ディッケンソン (tb)、ソニー・ホ
 ワイト、エディ・ヘイウッド (p)、他

1. 奇妙な果実
2. イエスタデイズ
3. ファイン・アンド・メロウ
4. ブルースを歌おう
5. ハウ・アム・アイ・トウ・ノウ
6. マイ・オールド・フレンド
7. アイル・ゲット・バイ
8. 水辺にたたずみ
9. アイル・ビー・シーイング・ユー
10. アイム・ユアーズ (他、全 16 曲)

“不世出の天才歌手”ビルリー・ホリデイ~人生の終幕



ラスト・レコーディング
ビルリー・ホリデイ
 (ユニバーサル:UCCU-5188)

ビルリー・ホリデイ (vo)、
 レイ・エリス (arr, cond)、他

1. オール・オブ・ユー
2. 時に楽しく
3. ユー・トゥック・アドヴァンテージ
4. オブ・ミー
5. ホエン・イツ・スリーピー・タイム・ダウン・サウス
6. セアル・ビー・サム・チェンジズ・メイド
7. ディード・アイ・ドウ
8. かまわないで
9. オール・ザ・ウェイ (他、全 12 曲)

白いちなしの花とポーク・パイ・ハット

機会があれば、嘗て恋人同志であったビルリー・ホリデイとレスター・ヤングが疎遠になって以来、久しぶりの共演となったシーンが登場する『ザ・サウンド・オブ・ジャズ』というTV番組 (1957年)の映像を見て欲しい。レスターがソロを吹く姿に、ビルリーがちらっと視線を投げかけ僅かに微笑む表情が何とも印象深く、嘗ての恋仲であり、自らの人生をジャズに捧げ、ジャズによって表現してきた2人だからこそ、その姿が哀愁を誘う。互いに“レディ・デイ”“プレス”と呼び合った2人。トレードマークは黒髪に飾った白いちなしの花と頭にちよこんと乗せたポーク・パイ・ハット。そんな2人に捧げた秀逸なジャズ・ナンバーがある。ビルリーに捧げたマル・ウオールドロンの「レフト・アローン」とレスターに捧げたチャールズ・ミンガスの「グッドバイ、ポーク・パイ・ハット」。今夜はこの2曲を聴きながら、天国で寄り添う2人に乾杯しよう。

イラストレーター 笹尾俊一氏による絵本『JAZZ STORY』(BNN 出版)からのシリーズで、同氏の選曲・解説 & イラストによるコンパクト・アルバム。恋人同志でもあったビルリー・ホリデイとレスター・ヤングが1930年代後半に共演した音源を集めた最高のコラボレーションが聴ける。愛や刹那といった心情を切々と歌い上げるビルリーの歌声、それに寄り添い囁きかけるようなレスターのテナー。ビルリーの唱法とレスターの音色にはある種共通の美 & リズムがある。特に「ばかあなた (Foolin' Myself)」「あの人でなければ (I Must Have That Man)」「今年のキス (This Year's Kisses)」で聴けるレスターの歌心には陶醉させられる。これぞジャズのソロ~アドリブの真髄だ！

ビルリー・ホリデイといえば彼女の代名詞ともいえる名曲で1939年にコモドアに吹き込んだ「奇妙な果実」。ルイス・アレンの詩による人種差別でリンチを受けた黒人たちが木に吊り下げられている惨い光景を奇妙な果実と例えて歌った曲で、ビルリー自身も酷い人種差別を受けた身として、この「奇妙な果実」という楽曲に対する情感の表現には、他の如何なるシンガーも敵わぬ強い説得力がある。その曲名がタイトルになったビルリー最大のベストセラー作品。後にビルリーの十八番となるナンバー「イエスタデイズ」水辺にたたずみ」の他、「ファイン・アンド・メロウ」「アイ・ラブ・マイ・マン」等の自作曲も収められており、1939~44年にかけて録音されたビルリー絶頂期の歌声が満載！

本作の録音は1959年の3月に3回に分けて行われたが、録音最終日の3月11日から4日後の3月15日…バリから帰国したばかりのレスター・ヤングの死が伝えられた。そして、その4ヵ月後…ビルリーはレスターの後を追うようにこの世を去った。まさにビルリー・ホリデイ正真正銘のラスト・アルバム。その編曲と共に、晩年ビルリーがお気に入りだったレイ・エリス・オーケストラをバックに、残り僅かな余命を悟るかの様に声を振り絞るビルリーの歌声は、全盛期に比べて衰えは隠せないものの、胸に迫る切なさがある。そして、ジャケットに浮かぶうつむき加減に目を閉じるビルリーの横顔にも仏のような優しさが滲んで見える。“レディ・デイ”ビルリー・ホリデイの人生はここに幕を閉じた。

ジャンルを超えたビルリーの影響力

27歳の若さでこの世を去った1960年代を代表するアメリカのロック・シンガー=ジャニス・ジョプリングが、ブルースの女帝=ベッシー・スミスやフォーク歌手=レド・ベリーと共に、ビルリーに心酔していたのは有名な話。この2人、生き様が似ているかも…。

“Lady Sings the Blues”

1972年に元シューブリームスのダイアナ・ロスがビルリー役を演じた伝記映画で、ビルリーの自伝 (実質的には彼女のファンであった新聞記者ウィリアム・ダフティが、それまでのインタビューを編集し直したものに)に基づいた『Lady Sings the Blues (邦題:ビルリー・ホリデイ物語/奇妙な果実)』が公開されたが、この映画は商業的にも大成功を収めて、ダイアナ・ロスはアカデミー賞主演女優賞にノミネートされることとなった。